

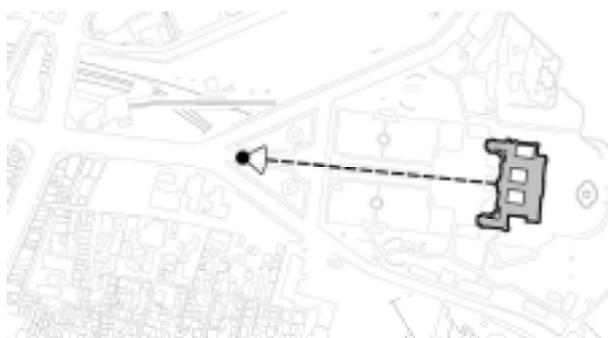
06

迎賓館：威風堂々のヴィスタ

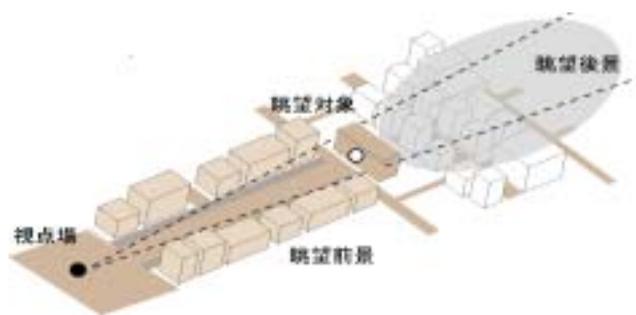
（港区元赤坂）



迎賓館を望む



迎賓館のヴィスタ



ヴィスタの構造

□ 西欧伝来の景観

最後に足を四谷まで伸ばす。四谷駅周辺で一際目を引くのが、迎賓館の佇まいであろう。

明治 42（1909）年に御所として建造され、「赤坂離宮」として使用され、昭和 40 年代に国の迎賓施設として改修された。建物自体は、ネオバロック様式の壮麗な洋風建築で、緑青の屋根、花崗岩の外壁、各種の装飾類などが調和のとれた美しさを醸し出している。しかし、圧巻はその前庭も含めた眺めの構造であろう。左右対称の前庭、並木、が視線を中心の一点、これも左右対称の迎賓館に集める。こうした都市設計手法を西欧伝来のヴィスタ設計という。

国会議事堂や東京駅を初め、我国の近代化を象徴する国家的な建造物は、全てこうした都市設計的な基盤の上に立地している。西欧諸国と肩を並べるために、まず、その都市設計のスタイルから導入することにしたのだ。

しばしばこうした眺望景観は、時に堅苦しく、そして威圧的に感じられる。しかし、それは紛れも無く我国の近代の進取の念を今に伝える貴重な近代化遺産である。

なお、こうした左右対称のつくりこまれた構成美は、例えば建物の後背（眺望後景）に関係のない建物が頭を覗かせるだけで、大きく損なわれる。国会議事堂への眺めがその典型例である。高さの規制などの保全施策が必要だ。